

ひつじやま NATURE BASE

— Park-PFIを用いた自然体験拠点の提案 —

自然体験 拠点 都市公園 Park-PFI

20FA019 大場舞子
指導教員 菅原大輔

1. 背景

インターネットの普及により様々なモノのデジタル化が進む中、新型コロナウイルスの流行によって急速かつ強制的に社会全体のデジタル化が進展した。特に現代の子どもたちはスマートフォンやゲーム機の普及で室内遊びが充実したことにより、外に出て自然の中で遊ぶ機会は少なくなっている。しかし自然体験が子どもたちに与える影響は多く、自然の美しさや怖さを体験することで生きる力が育まれると言われている。

また、少子高齢化や人口減少による消滅可能性都市の問題、核家族化や生活様式の多様化などにより地域社会における人とひととの繋がりが希薄化している中、地域住民の居場所づくりが多くの自治体で課題となっている。特に子ども・若者が地域コミュニティの中で育つことが困難になっているため、子どもの居場所づくりは地域づくりにも大きく関連していると言える。そのような中で2017年に都市公園法が改正され、「公募設置管理制度(Park-PFI)」が創設された。都市公園に民間活力を導入し、新たな地域の居場所になっている事例が増えている。

2. 目的

自然豊かな都市公園を敷地に自然体験の拠点をつくることで、子どもをはじめとする地域の人々が自然に触れられる新たな居場所となり、地域外の人々が訪れるきっかけになるとともに、都市公園としての利便性を上げることを目的とする。

3. 対象敷地

埼玉県秩父市と横瀬町の境にある羊山公園の芝生広場を対象敷地に選定する。武甲山から連なる山陵の尾根部分を利用してつくられた都市公園で、秩父盆地を取り巻く山々を眺望できる。豊かな動植物が生息しており、特に公園南側に位置する芝桜の丘には、毎年多くの観光客が訪れる。



図1 敷地説明

4. 設計手法と空間構成

羊山の自然を活かし、人々が集う自然体験の拠点を設計する。敷地は丘になっており、敷地から見える横瀬の山々、秩父盆地のシンボル武甲山、関東山地の山並み、秩父市の遠景を切り取る線と、もともと敷地にある桜、池、藤棚、野鳥のさえずる森、菖蒲田の自然の要素を組み合わせ、回遊ルートを設定する。それに沿って屋根をかけ、周りの要素とさらにつながるように飛び出す部分を作る。

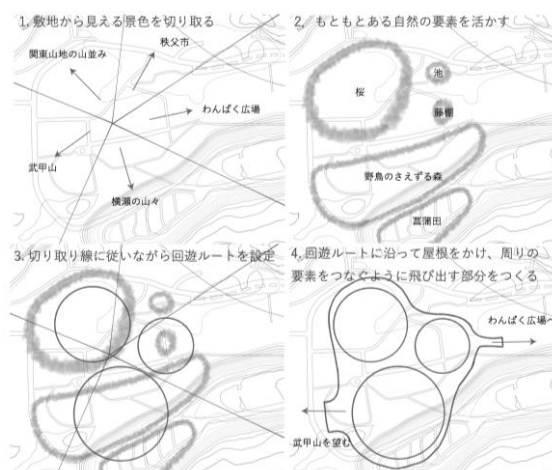


図2 ダイアグラム

回遊性のある屋根の下に、屋内の機能として多目的ワークスペース、展望・展示スペース、カフェスペース、図書スペースを配置する。

多目的ワークスペースは平日15時までは自然教育を行うフリースクールの拠点、15時から子どもたちの居場所として自由に利用される。休日はまちや地域外の人と体験イベントなど、人々が集まる拠点として利用される。自然の材料を使った工作など自由に制作できるスペースとしてつくるデッキが屋外とつながるように設けられている。

カフェスペースは、カフェ兼、曜日によって子ども食堂などで利用できるシェアキッチンとして運用され、敷地内の畑で採れた材料が使われる。

屋外の機能は既存のわんぱく広場と公園内にある自然を生かした観察デッキ、藤棚、畑のほか、子どもたちが自らあそびをつくる冒険あそび場を配置する。

5. まとめ

この施設を通して子どもや地域の人々がもともとある豊かな自然に気付き、触れ、観光などで訪れた地域外の人にもまちの魅力を感じてもらえるきっかけになるとともに、都市公園の適切な更新と質の向上に寄与するだろう。

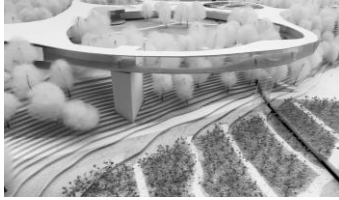


図3 展望スペース



図4 多目的ワークスペース



図5 つくるデッキ

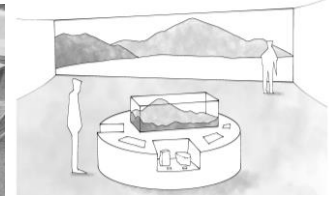


図6 展望・展示スペース

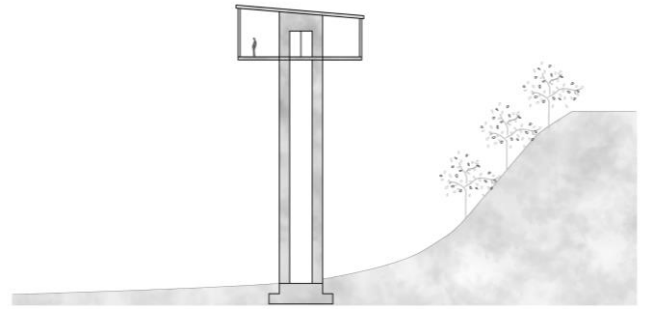


図8 A-A'断面図

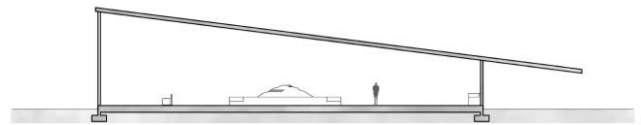


図9 B-B'断面図

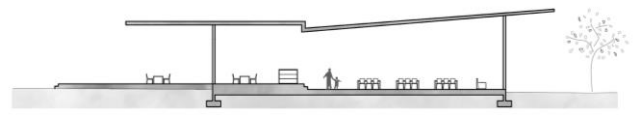


図10 C-C'断面図

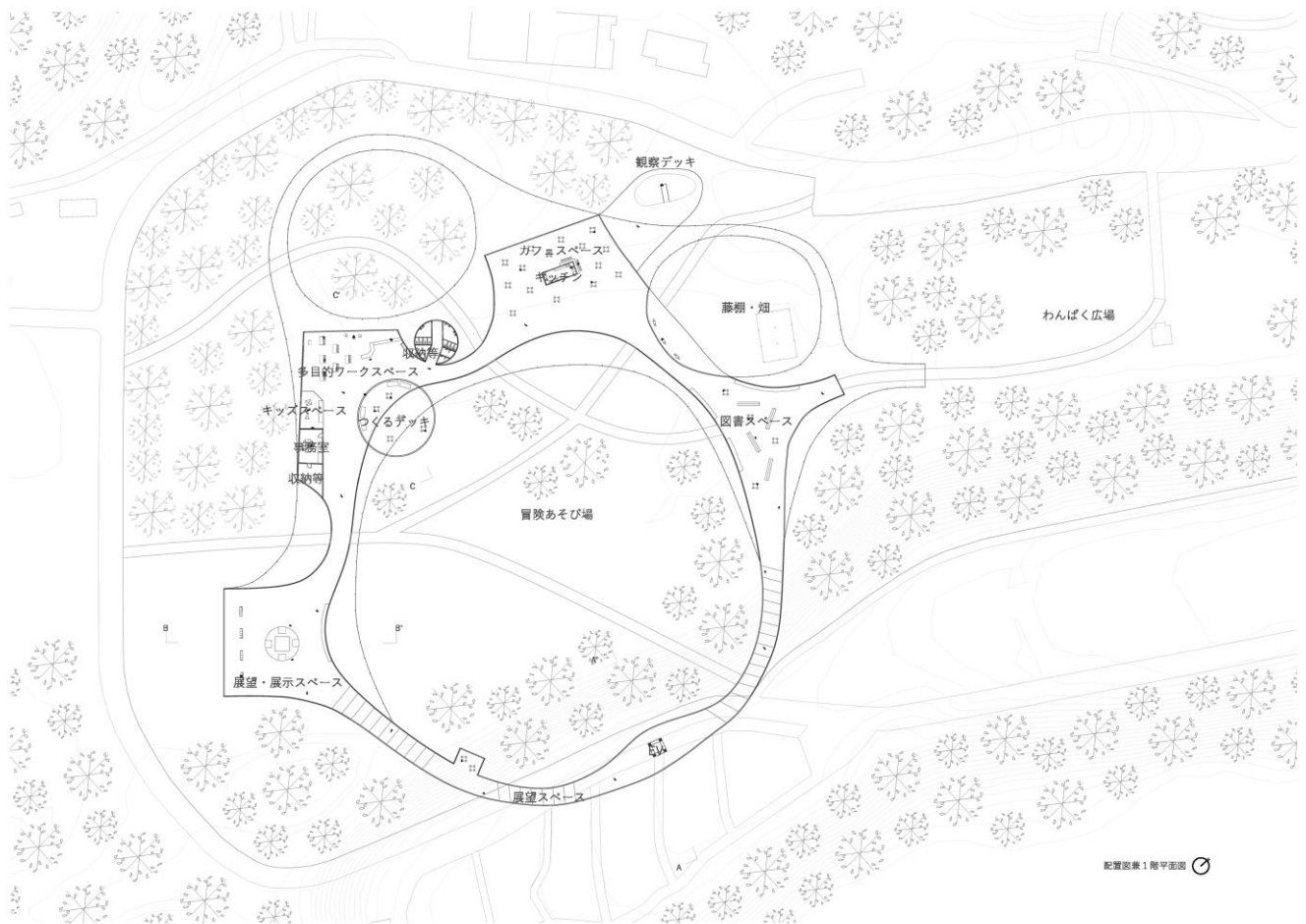


図7 配置図兼1階平面図